

旧市街

ふとしたことで目が覚める
私はどこにいるのだろう
先だっては本を立ち読み

夕暮れの淡い^{ひかり}陽光に俯いて

どうしよう
この街は幻のように私の身体に
知らぬ振りして触れてくる
なのにここを離れられない

それに比べてここを出ると
どこもかしこも
私の目の前に堂々と突きつけてくる
見るがいい、知るがいい、と・・・

何も運ぼうとはしない風が
私の肩を過ぎてゆく
時折り
そして、何度も、何度も

誰もが大して変わらぬ^{くらし}生活
そして多少遅かれ早かれ
永遠の眠りにつく、と
誰もが、そうして安らかだ

ああ、その中で私は
英雄になろうとした
人々に溢れるほどの涙を流させ
その心に刻み込まれることを望んだ

哀しみを微笑し
人々はただ生活を続けることを望んでいた
私はその中で叫んだ
「生活なんぞ、くそくらし」

確かに涙は流れ出ていた
けれども翌日には跡形もなく
この街は私に触れてきた
何事もなかったかのように

(1994.9.15)